



古代少年

金時 豆太郎

古代史クラブの顧問は、いつものように両手を大げさに広げ、舞台劇でも演じているかのように、良く通る声を上げた。

「諸君、見たまえ。この美しい海岸を。はるかに目を上げて、青くきらめく水平線を望みたまえ。群れ飛ぶ海鳥たちの声を聞きたまえ。足をぬらす暖かな波を感じたまえ。砂浜にびっしりと目を出している貝たちを集めたまえ。そうだ。ここだ。ここが我らの住むべき土地だ。ここに村を作ろう。ここに我らの理想郷を築くのだ」

「先生、海なんて見えませーん。ここは埼玉県ですよ。関東平野のど真ん中です。知ってると思うけど」
高校二年生のユカがいつものように話の腰を折る。

顧問の竹本由紀夫はお気に入りのカウボーイハットを脱ぎ、額の汗を袖でぬぐうと、薄くなった髪をかきあげ、人差し指を振りながら言った。

「チッチッチ。ここに貝塚があるということはどういうことかね。いいかね。目の前にある物だけを見ていたのでは古代のことは分からないのだ。もっと遠くを見なさい。そう、遠い過去を見なさい。過去の陽の光を感じ、過去の風にあたりなさい。そこにあった人々の生活と人生をはっきりと心に描くのだ」

「先生。今度の新入生は遠くを見るのが得意ですよ」

三年生のサトコがいつもの皮肉っぽい口調で、貝塚を前にたたずむ二人の女子を指差した。

新しく入部した一年生の芳子と美香が、お揃いのリュックサックを背負い、うっとり目を閉じて立っていた。

「先生。潮の香りがしてきました」とおかつぱ頭の芳子が深呼吸をする。

「水平線が見えます。海風が強いわ」と美香が両手で長い髪をかき上げる。

竹本は目を細めた。

「ふむ。なかなか見どころのあるのが入ってきたな」

浦和第四女子高校の古代史クラブの、通称「探検」と呼ばれるフィールドワークが行われていた。日本史を受け持つ教師の竹本はクラブの設立当初からの顧問だ。道路工事などで埋蔵遺跡が発見されると、市や県からも声が掛かり駆り出されることが日常になっている。今日はまだ、「探検」が始まったばかりだというのに、ポケットがたくさんついたお気に入りのベストを着込んだ竹本は、びっしょりと汗をかいている。五月晴れの続く連休の一日だった。

「よし、いいか。まず地形図を確認するぞ。関東平野といってもまっ平らというわけではない。丘もあるし谷もあるぞ。それに昔はこのあたりまで海が入り込んでいたのだ。この貝塚に古代の人々が貝殻や生活ゴミを捨てていたのは今からだいたい二千年から二千五百年くらい前のことだ。歴史的には何時代だ？」竹本が尋ねた。

「はい、縄文時代の終わりころです。もうすぐ弥生時代になるころです」と、三年生のケイコがまじめに答える。声が低い。

「そうだな。縄文時代といっても、例えば世界史ではイエス・キリストが生きていたような時代だ。ローマ帝国が大きな円形競技場をあちこちに作ったり石の舗装道路をヨーロッパ中に張り巡らしていたころだ。ここに住んでいた人々だって毛むくじらの原始人というわけではないんだぞ。二千年なんてあっという間だ。今の我々と変わらない人生がそこにあったのだ。君たちの先祖がここで生きていたのかもしれないんだ。貝塚がここにあるということはすぐ近くに家があったということだな。当時の家はどんなものだったか」

「はい。竪穴式住居でーす」二年生のミユキが少し鼻に掛かったような甘え声で答える。

「そうでーす、だ」と竹本も少し調子に乗っている。

「いいか、今年の夏休みには久しぶりに合宿をして竪穴式住居を実際に作ってみるぞ。君たちにも一晩そこで寝泊りしてもらおうからな」

「わーい」

「ヤッター」

十人の参加者たちは嬉しそうな声を上げた。結局、このクラブに入部する女子はみんな少し変わっているようだ。

「よーし。じゃあ、そこの丘に登ってみよう。まず全体像をつかんでから、細かな観察を行うんだ」
竹本はそう言うと、どンドン歩いていった。

小高い丘の上からは広い町並みが見渡せた。小さな公園になっている貝塚周辺の土地を除けば、二階建ての家が並ぶ普通の住宅街になっている。

「全員で手をつないで一列に並びなさい」

竹本の指示に従って、丘の上の十人の高校生は並んで立ち、家々の屋根を眺めた。探検にスカートは厳禁なので、ほとんどの者はジーパンにスニーカーだが、思い思いの色や柄のシャツやブラウスが並び、少女たちは十種の春の野花のように見える。眼下にはかわら屋根の波が続き、その上には良く晴れた青空が広がっていた。屋根より高い鯉のぼりの家族があちらこちらで水のない空中を泳いでいる。少し霞んではいるが富士山の姿も遠い西の空に見える。

「ちゃんと遠くを見ているか。遠い過去を見るんだぞ」

「先生、見えませーん」とユカがいたずらっぽく言う。

竹本はカウボーイ・ハットを横向きにかぶり直し、海賊船の船長のように叫ぶ。

「よーく見るんだ。野郎ども、もっともっと遠くを見るんだっ」

「出ました」サトコが笑いながら拍子をとる。

「三、ハイ！」

十人が声を合わせて歌いだす。

『♪ もっともっと、たけもっと。遠く見てちょうだい。もっともっと、たけもっと。キビシー！』、あはははは」

無邪気に笑う少女たちを見て五十半ばの竹本はつぶやいた。

「石坂洋二郎の世界だね。俺にも無論、青春はあったさ」

午前中は二つの班に分かれて貝塚周辺を探検した。遺跡班と生物班だ。

遺跡班は、貝塚を始めとして古代の人々の生活を再現するように調査する。実際に周辺を歩き距離感をつかむのも大切だと竹本が強調するので、いつもかなり歩き回る。大きな巻尺が活躍する。体力のある女子たちの担当だ。

生物班は遺跡周辺の植物や動物を観察してスケッチしたり写真を撮ったりする。大きな樹木だけでなく小さな草花や昆虫などの名前も、持参した図鑑からできるだけ調べなければならない。現代の生態系を知ることが古代の自然を思い描くための基礎になるのだ。

二年生と三年生の部員たちはてきぱきと探検を進める。慣れない一年生たちはついていくのがやっとだ。昼食前にはもう、ここにあったはずの古代の村の想像図が出来上がるのだ。

三年生のサキが、二つの班が集めたデータを基に、慣れた手つきで大きなスケッチブックに書き込んでいく。昔もそこに息づいていたであろう草木や小さな生物もそっと描かれる。美術部も掛け持ちしているサキの手は、二千年前の自然に囲まれた村を描き出してゆく。

海岸から少し入り込んだところにある村には十五ほどの草屋根の家が群れて建っている。栗の木が並んで植えられている。川沿いには収穫を待つ畑もある。決まって最後に描かれるのは人間だ。海岸で貝を拾い集める女と子どもたち。少し沖では素もぐりで大きな貝を捕る女たちもいる。村の広場では大勢の男女が楽しそうに踊っている。じゃれつく犬もいる。狩りから帰ってきた男たちの勇ましい姿も描かれた。

一時ころになってやっとお昼の休憩になった。丘の上にある小さな展望公園で固まってお弁当を食べる。少女たちは相変わらずにぎやかだ。

「ねえ、今日は熊ちゃんは来なかったのね」と、サトコがサキに声をかけた。熊ちゃんとは古代史クラブのもう一人の顧問である熊田正輝のことだ。まだ独身の、音楽の教師だ。つぶら過ぎる目を除けば面長で端正な顔立ちの、どちらかというといケメンといえないこともない。「探検」にはいつも二千メートル級の山にでも登れそうなフル装備で現れて荷物運びなどの雑用を引き受けていた。

「うん。今日は山岳部のほうの計画があって来れなかったの」とサキは残念そうに答えたが、すぐに「でもね。明日は会えるんだ、うふ」と笑顔になった。

「ええー、デートするの?」と二年生のユカが大きな声を上げた。

固まって弁当を食べていた一年生の四人も声は出さなかったが、聞き耳を立てる。

「ちょっと、大きな声で言わないでよ」とサキは竹本のほうをそっと見た。のんきな中年男はベンチの上で、

脂肪のついた腹を上にして、いびきをかいている。

「やるねー、サキ先輩」とユカがうらやましそうに言う。

「いいなー」とミユキが甘えた声を出す。

「うらやましい」とケイコが低い声で言う。

「あのね、遊びじゃないのよ。お互いに真剣なんだから。言っちゃおうかな……。今度、熊ちゃんのご両親にも会うのよ」とサキが決定打を放った。

十人全員が「ええーっ」と大声を上げた。公園に遊びに来ていた人々も何事かと目を向けた。竹本は……寝返りをうった。

午後は自由行動だ。おしゃべりをしながら、それでも草花のスケッチをしたり、図鑑を調べたりしている生徒もいる。

美香と芳子は、ほとんど出来上がった古代の村のスケッチを、小さな岩に立てかけて眺めている。

「なんだかステキな村ね。ここにも私たちと同じような生活があったのね」と、長い髪的美香が夢見のような目つきでつぶやいた。

「うん。そうだよ。きっと泣いたり笑ったり、今と変わらない人生があったのさ」と男の子のような口調で、おっぱ頭の芳子はうなずいた。

出身の中学校が違う二人は高校に入って初めて知り合った。クラスも違うのだが、日本史を教える竹本由紀夫の授業に魅せられて、竹本が顧問を勤める古代史クラブに足を向けたのが知り合うきっかけになった。二人は好みの本が似ていた。特に二人を結びつけたのは、日本に住む小人が活躍する物語だ。小人たちの住む小山を見つけることが二人の共通の目標になっている。

二人は、木の幹を模したセメント製の柵の上に並んで座り、黙って遠い昔を眺めていた。雁の群れがゆっくりと高い空を横切っていった。

少し強い風が吹き、岩の上に置かれたスケッチブックの村をふるわせた。

風に髪をゆらして、微笑みを浮かべながら目を閉じていた美香の顔が、みるみると曇り始める。恐怖の表情にも見えた。

「たいへんだわ。水平線が、水平線が、盛り上がってくる。真っ黒な波がやってくるわ……。ああっ、ああっ、村が、流されるっ！」

第1章 裸足の花嫁

「ソラン。お前、お父さんが欲しいかい？」

母のトモはたずねた。

息子は母の胸の内を思いながら答えた。

「……うん」

丘の上の岩場からは海沿いの平地に作られた村が隅々まで見渡せる。十五ほどある家々は、どれも川面に茂る丈の高い草を厚く葺(ふ)いた屋根で覆われている。

二人が腰をおろしている岩場は母と子の特別の場所だ。母は喜びや悲しみを一人息子に打ち明ける場所としてここを選んできた。

《きっと、母さんはあの人と結婚したいんだ》

まだ、八才になったばかりのソランは、欲しいか欲しくないのかと尋ねられると決まって、「どっちでも」と答えるくせがある。祖母はそんなソランを「子どもらしくないねえ」と笑っていた。しかし、今日の母の問いかけには「うん」とはっきり答えた。

母はそれきり何も語らない。海風が母の長い髪を揺らしている。ソランはじっと母の横顔を見つめていた。花が咲き蝶が舞う季節の一日だった。

母の視線の先にある砂浜と海は、いつもなら女たちの漁場となっているところだ。しかし、この村の長(おさ)は他の村とは違う掟(おきて)を課していた。七日に一日は女たちの漁も男たちの狩りも休まなくてはならない。安息の日だ。その日の朝には、村の長が読み聞かせる巻物の言葉に耳を傾け、夕暮れまでは男も女も子供たちも、気ままな時間を持つことになる。今日がその安息の日だった。

満月が欠け、ふたたび満ちた。雨の月になった。

陽が沈み、新しい一日が始まった夕暮れに、ソランの家に花婿(はなむこ)とその友人たちの行列がおとずれた。西の空にはまだ夕焼けが残っている。雨の晴れたむし暑い日だった。

先頭にいる花婿が進み出る。背丈がひとときわ高い。白い麻布の外衣(がいい)を着て、紫に染めた帯をしめている。額に結ばれた小さな黒い四角の箱と、十ほどの宝玉が連なる首飾りが人目を引いていた。が、それ以上に異彩を放っているのはその風貌(ふうぼう)だ。陽に焼けた赤銅(しゃくどう)色の肌と際立って長い鼻筋。豊かな黒い髭が顔を覆っている。肩まで届く黒髪は後ろで二つに束ねられている。袖なしの外衣からは筋肉のついた太い腕があらわになって伸びていた。

家の戸口の前に立った花婿は大きな声を張り上げた。

「私の妻のトモよ。出ておいで。あなたの美しい姿を見せておくれ。神が与えてくださった私の助け手よ。さあ私の手をとって私の家に来ておくれ」

木の格子扉が開き、花嫁が低い軒先をくぐって姿をあらわす。袖のついた丈の長い外衣を身につけている。細い上等の麻糸を丹念につむいだ布は、薄く軽やかに花嫁のやせた体を包んでいた。青く染まった帯のほかには何の飾りもない。腰まで届く黒髪は束ねられず、風に揺れている。小さな顔には子供のような緊張が浮かんでいる。花嫁は裸足だった。白い足首が細かった。

花婿は人目もはばからずに美しい女性を抱擁する。小さな灯し火を手にした友たちの祝福の聲がひびく。

「ヤーサカ！ ヤーサカ！」

「おめでとう、ヤーサカ！」

祖母のウメと息子のソランも嬉しそうに声を上げた。

「おめでとう、トモ！」

「ヤーサカ、お母さん！」

花婿は、花嫁の息子の声に気づくとソランに近づき、いきなり空に抱え上げると、自分の肩に乗せて座らせた。にぎやかな笑い声が巻き起こった。花婿はソランを肩に乗せたまま花嫁の手を引き、自分の家に向かって歩き始めた。村中の人々は道沿いに並び祝福の声をあげた。

「ヤーサカ！ ヤーサカ！ 村長(むらおさ)様」

「ヤーサカ！ ヤーサカ！ ダavid様」

戸惑った表情でいる男の子を肩車した大きな花婿と、飾り気のない裸足の花嫁は、この瞬間、世界で一番幸福だった。

二人は村の中央にある広場を横切り、木造りの小さな社(やしろ)にたどり着く。ソランを肩から下ろした花婿は、履いていたわらじを脱ぐと、新妻と共に地面にひざまずいた。花婿の口から聞きなれない言葉が流れ出した。

ソランが聞き取れたのは「ヤーサカ」と「ヤーホー」という言葉だけだ。この言葉は村の誰もが知っていた。嬉しいときには「ヤーサカ」と声を上げ、心が感動したときには「ヤーホー」と叫ぶ。村長ダビドの若いころからの口ぐせだった。その言葉の意味を、始めは誰もが知らなかったが、皆は自然に真似をするようになった。やがてダビドがこの土地の言葉を覚え始め、たどたどしく説明するようになって人々は意味を知った。ヤーホーとは、ダビドの一族がいた遠い故郷の地で信じられている神を呼ぶときの言葉だった。ヤーサカとは、祝福を求める祈りの言葉だった。

海の上の青い満月が花婿と花嫁に光を注いでいた。まだ暑さの残る夕暮れの空気には草木の放つ甘い香りが満ちていた。村の広場では祝宴を待ちわびる男女たちが集まり、中央に作られた大きな薪の壇に火を灯していた。

第2章 親友

幾つもの月が欠け、幾つもの月が満ちた。四つの暑い季節が過ぎ、四つの寒い季節が過ぎた。蝉が鳴く一番暑い月になった。

「ソラン、右手を頬につけて固定するんだ」

親友のタケルが明るい茶色の瞳をじっとこちらに向ける。ソランは慎重に弓矢を構えた。ひゅっと飛んだ矢は、的になっているカシの木の幹をとらえることはできなかった。

「力はだいぶついてきたな。何度も練習して勘をつかむしかないな」と、きっぱり言ったタケルは、素早く矢をつがえ一呼吸の後に放った。コンツと高い音を立てて、矢はカシの幹の中央に突き立った。

「め、命中！」ともう一人の親友のサトシが声を上げた。サトシは幼いころからの吃音を少しも気にしていなかった。むしろ誇りにしていた。話す前に考える習慣を身につけたサトシは、誰もが認める思慮深さを持っていた。視界に入る物の数を無意識に数える癖がある。他の人々が気付かない周囲の小さな変化も、サトシの五感は見逃さない。

たくましく日に焼けたタケルが皮肉っぽい笑顔を向ける。

「もうすぐソランも十二才になるから、一人前の男の仲間入りだな。一緒に狩りに行くことができるから嬉しいよ。でもさ、ちょっと心配もあるな」

「うん。ソランは優しすぎるからね。と、鳥も獣も、こ、殺せないんじゃないかな」とサトシも笑う。

「実は僕もそれが心配なんだ」ソランは素直に認めた。

幼いころ、ふざけて投げた小石が木の幹で鳴いていた蝉に当たり、ぱらりと落ちていった。その光景がいまでも苦い記憶になっていた。体をつぶされた蝉はそれでも片方の羽を小さく震わせていた。ソランは身震いがして、苦しむ蝉を見続けることができなかった。

《あの蝉は死んでしまったに違いない。もう二度とこんなことはしない》

サトシは海の沖にある岩場で女たちが漁をしている様子を遠くに眺めながら言った。

「だってソランは魚だって、と、取れないでしょ。ソランの母さんは魚をヤスで、と、捕る名人なのにね」

「うん。どうしてもできないんだ。魚だって痛いよね」

「変わった奴だよな、お前は。でも、お前は弱虫じゃないからな。それも不思議だ」とタケルは高い空を見上げて言った。サトシもうなずいた。

「ソラーン」と、海のほうから呼ぶ声がした。沖にある岩礁に立った女性が大きく手を振っていた。

「母さんだ。何も着ていないのに。まったく」ソランはあきれたように首を振った。

暑い季節の月の間、女たちはたいてい裸で海にもぐって魚や貝や海草を捕っている。女たちの海の収穫は皆が生きていくための貴重な食料になっているのだ。

この村の長のダビドは普段の生活で女たちが肌をあらわにすることを禁じていたが、海で漁をする時と赤子に乳をやる時は例外とされていた。沖の海では女たちも男たちと同じような褌(ふんどし)を身につけるだけだ。何も身につけずに泳ぐ者もいた。子ども以外の男たちが漁をしている女たちに近づくことは禁じられていたので、海の女たちはのびのびとしていた。

母のトモは細い体をしならせて力いっぱい手を振っている。長い髪だけがその裸体を隠していた。

「おいでー」とトモが叫ぶ。

他の女たちも面白がって同じように叫んで笑い声を上げた。

「おいでー」

「おいでー、あははっ」

少年たちと年の違わない少女たちもいる。皆、裸の体を隠そうともしない。

「やだよー」ソランは大声で叫ぶと海に背中向けて歩き出した。親友たちも、もっと海のほうを見ていたい気持ちを抑えてソランの後を追った。

残り少ない命の力を惜しみなく注いで叫ぶ蝉たちの声が、生きることへの賛歌のように響いていた。

第3章 ダビド

「わたしが生まれたところは、西の海を渡って、さらに西のほうに何日も何日も歩いて行かなくてはならない遠いところにある。わたしたちは十の部族からなる大きな民であった。しかし、強大な敵の国に滅ぼされ、人々は散らされてしまった。父は、志を同じくする者たちと共に東の土地へ向った。東の海を渡ったところに、故郷と良く似た、山と川と海に囲まれた国があると聞いたからだ。

何人もの仲間を途中で失ったが、父と母はこの国へとたどり着くことができた。わたしはこの国で育った。しかし、成長するにつれて仲間の者たちの行いに疑問を抱くようになった。彼らはこの土地で、石や木で作った神々を作るようになったからだ。それは先祖たちが信じた神が厳しく禁じていることであったのだ。

わたしは父と母が亡くなったのを機会に旅に出た。川をさかのぼり、あちらこちらを放浪した。山深い地で病に倒れていた時、この村の人々に出会ったのだ。言葉の分からないわたしに、この村の人々は親切にしてくれた。わたしもまたその恩に報いようと懸命に働いた。わたしは狩りの腕前が良かったので村人に多くの獲物をもたらした。山の中を飛ぶように走るわたしの姿を見て皆は驚いていた。父から教わった鍛冶の技術を活かして青銅や鉄の道具もたくさん作った。風を起こすふいごを初めて見た者たちは子供のように感心していた。

多くの月が満ち欠けし、多くの暑い季節と寒い季節が過ぎた。わたしは村人の信頼を得て長(おさ)と呼ばれるようになった。わたしの志は広がった。いつの日か、故郷にあったというムギを手に入れて大きな畑を作りたい。そうすれば村人たちが飢えることもなくなると考えた。村人たちの許しを得て、あちらこちらを旅し、肥えた広い土地を探した。そしてようやく、海と川に挟まれたこの土地を見つけたのだ。今から九年前のことだ。ソラン、お前が生まれる少し前のことだよ。この土地で見つけたクリの木を育ててクリ畑も作った。これは大成功だ。おかげで毎日おいしいクリの実を食べることができるのだ。

ソラン。お前の父をわたしは良く知らないが西のほうからこの国へ渡ってきた部族の人のようだ。トモを見初めて妻とし、遠い村へと連れて行った。しかし、お前が生まれた後、すぐに戦死んでしまった。西のほうでは戦が多いと聞く。いくつもの大きな村が争っている。村の周りは敵が入れないように塙で囲われているのだ。わたしは戦が嫌いだ……。

トモは幼いお前を抱えて、苦労しながら母のいるこの村へと帰ってきた。

わたしは、まだ山の中の村にいた時、子どもころのトモを覚えているが、賢くて明るい子どもであった。はっきり言えば、男まさりのやんちゃ娘であったのだよ。雪の中で倒れていたわたしを見つけてくれたのがトモだった……。わたしは、帰ってきたお前の母のトモを深く愛するようになった。そして夫婦になったのだ。わたしはお前のことも深く愛している。お前は人並みはずれて優しい子どもだ。その優しさは神がお前に与えた贈物なのだから無くしてはいけないよ。いつの日かこの村のためにお前の贈物を使っておくれ。わたしはこの村を平和な神の国としたいのだ」

第4章 コメ

村の長のダビドは時々、数人の男たちを連れて遠出をする。最近は西のほうの村を見に行くことが多かった。鉄の農具や毛皮などの貴重なものを持っていくが、換わりにいろいろな珍しいものを土産として持ち帰る。今回の遠出は長い期間になった。そして一匹の子犬と一人の見知らぬ老人を連れ帰った。

「トモ、帰ったぞ」

上機嫌の父はいきなり扉を開けて家の中に入ってきた。ドングリを粉にして作った菓子をほおぼっているソランを見ると、懐から小さな茶色の生き物を取り出した。

「ソラン、お土産だ。珍しい種類だ。大人になってもあまり大きくはならないが毛が長くなるそうだ。今もまるでモズクのようなのだが。ほら手にとって見ろ」

ソランは恐る恐る両手を差し出して受け取った。その生き物はソランの手の中で小さな手足をぐっと伸ばすと……あくびをした。

「かわいい」ソランは子犬を一目で好きになった。

「お前がちゃんと育てるんだぞ。犬は利口だからな。ちゃんと寝るなら役に立つぞ。この種の犬は狩りにも役立つそうだ。何か名前も考えてやれ」

ソランは大喜びで言った。

「名前はモズクにする」

「ははは、モズクか。お似合いだ。小さいうちは仕方ないが、家の中では飼えないから、お前が小さな家でも作ってあげなさい」

「はい」

「母さんはどこにいる？ エイミは？」

「母さんは海です。エイミはおばあさんのところで遊んでいます」

「年中、海に行ってるな、トモは」

ダビドは妻に会うのが待ちきれない様子で、一枚の外衣を掴むと海のほうへと急いで歩いていった。

「トモ、帰ったぞ」

波打ち際に立ったダビドは沖の女たちに向って大声で呼びかける。岩の上にはいた一人の細い姿の女がこちらに向き直り、裸のまま海に飛び込むと、抜き手を切って一直線に泳いでくる。トモの得意の泳ぎ方だ。ダビドは膝まで海に浸かりながら女を迎え、外衣を素早く裸の体の上かけると、女の腰に手をあて青い空に高く持ち上げた。トモは笑いながら足をばたつかせた。ダビドは、そっと子どもを抱えるようにトモを胸に抱き、長い接吻をした。沖の女たちと陸の男たちの歓声が上がった。輝く太陽が真上にあった。

ダビドが連れてきた老人は年長者の家に寝泊りしながら、村人にコメづくりを教え始めた。南のほうから伝わってきた農法だ。コメは、育てるのに苦労はあるが、ヒエやアワに比べて粒が大きいので多くの実りを期待することができた。そして何よりも、美味しかった。

老人は村の近くを流れる川の岸辺の土地を見定めた。村の男たちが集まり、固い木で作ったクワをふるって土地を耕した。男たちは収穫への期待に胸を膨らませていた。

年長者の一人が得意そうに話した。

「俺は西のほうの村に行った時にコメを食わしてもらったことがあったが、柔らかくて甘くて旨いぞ。コメは粉にしないでそのまま煮て柔らかくしてから食うんだ。魚の干物と一緒に食った味が忘れられねえな。手間をかけて真っ白な粒にしたコメはもっと美味しかった。口の中で溶けてしまうような柔らかさだった」

「いいなあ。俺も食いてえな」と若い男がうらやましがる。

「それにコメはさ。湿気らないようにすれば何年でも取っておけるんだとよ。もう飢える心配がなくなるのさ。西のほうではコメ長者が何人もいるそうさ。いいなあ、俺も長者になりてえなあ」

老人の教えのもとに川辺の土地が耕され、周囲には木を削って作られた矢板が隙間無く打ち込まれた。川から畑まで掘られた細い水路を伝わって水が勢い良く畑に流れ込んだ。始めに畑の中の小さな一角に植えられたコメはすぐに芽をだした。この苗を村人総出で水田となった畑に植える。この時は男も女も老人も子どもたちも目を輝かせて働いた。子供たちは泥土が足の指の間をぬるぬるとすり抜ける感触に夢中だ。転んで泥だらけになった男たちは、逃げる女や子どもを追いかけては抱きついた。祭りの時のように人々は笛を吹き、太鼓を鳴らし、歌い、踊った。年配の者たちは、この土地に移り住んでよかったと思いながら、若者たちの喜び踊る力強い姿を見つめていた。

夕暮れになると、川の岸辺に群れていた蛍が水田の水に引き寄せられるように飛んできて、喜び踊る人々の輪に加わった。無数の小さな光が、寄せては引く海の波のように、透明な空気の中で踊っていた。

第5章 妹

幾つもの月が欠け、幾つもの月が満ち、五つの暑い季節が過ぎ、五つの寒い季節が過ぎた。そしてもう一つの暑い季節が過ぎようとしていた。

「ソラン。今年の寒い月にはわたしも狩りに行く」

少女はきりっと口を結び、兄に告げた。背中の中ぐらいにまで無造作に伸びた髪は、潮風を受けて宙に舞っていた。まっくろに陽に焼けた顔の、大きな目と白い歯並びだけが目立っていた。丈の短い袖なしの外衣から細い手足が伸びている。

呼びかけられた十七才の兄は、貝を集める手を休めて答える

「エイミはまだ八才になったばかりだろ。狩りに行くのはまだ無理だよ。十二才になってからだよ。僕だってそうだったし。それに女が狩りに行くななんて聞いたことがないよ。森は怖いよ。何が出てくるか分からない。僕だって毎回すごく緊張するんだ。去年は熊に襲われて一人が死んでいるんだ」

「わたしは大丈夫だ。動物と話ができるからね。本当に声が聞こえるわけではないけれど、気持ちが分かるんだ。それにわたしは狩りに行っても動物を殺しはしない。話をするだけだ。目を見て、手で触れたいんだ。いろいろな動物とね。殺すなんて可愛そうだろう」

「それじゃあ、狩りとはいえないよ。確かに動物を殺すのは可愛そうだ。僕もむやみに矢を射ったりはしないよ。でもどうしても生きるために必要なときだけ、神様に祈ってから矢を射るんだ。でも本当の気持ちはそんなことしたくない。生き物を殺すのはすごく心が痛むことなんだ。いつか動物を殺さなくてもいい世の中になって欲しいといつも思ってるんだ」

「うん。知ってる。ソランは優しい。ソランを好きだ」妹は母によく似た口元をほころばせた。

「あん、あん」毛足の長い茶色の犬が走ってきて兄と妹の足元にじゃれついた。

「モズク、帰ってきたんだね。父さんも無事かい？」と兄が尋ねた。

「父さんと母さんはここに来るんだね」と、妹が犬の代わりに答えた。

父と母は手を繋いでゆっくりと歩いてきた。父の髪には白髪が目立つようになっていたが、力強い姿に衰えは感じられない。三十を過ぎたはずの母は少女のような恥じらいを顔に浮かべ、父に寄り添っていた。

「ソラン。エイミ。父さんが帰ってきましたよ」

母は嬉しそうな声を上げた。

ダビドの朗らかな声が続く。

「ソラン。エイミ。腹ペコだ。はやく食事にしよう。今日は母さんが白いコメを煮てくれた。家の中はいい匂いがしている。イカの塩辛で久しぶりに酒も飲みたい。ソランも飲むか。お前はすぐに酔ってしまう。エイミはわたしに似て酒に強い。だが、まだ子どもだからあまり飲んではいけない。飲みすぎると自制心をなくしてしまう。酒は神様が人の心を喜ばせるために与えてくれたものだが、深く酔うまで飲むことは禁じられている」

海の中の岩礁を眺めていた母が振り返って言った。

「ダビド。今日は私も飲ませてね。ダビドの好物のイカの塩辛がとっても美味しくできたのよ。それと海苔で作った甘辛の煮物も白いご飯によく合うわ。たくさん作りすぎてしまったから年長者たちの家にも差し上げましょう」

「うまそうだ。待ちきれない。帰るぞ」

ダビドはトモの手を引くと早足でまっすぐに家に向った。二人の子どもと一匹の犬はゆっくりとじゃれあいながらその後続いた。

今夜はおばあさんの家に泊まらなくてはならないな、と兄も妹も了解していた。

第6章 家族

「朝ですよ。ソラン起きなさい」

明るい母の声が聞こえた。家の中にはコメの煮えるいい匂いが満ちていた。母の鼻歌が聞こえる。

《母さん、ごきげんだ》

ソランは自分が祖母の家ではなく父と母の家にいることを思い出した。寝坊はできない。

「父さんとエイミはどこ？」ソランは父と妹がいないことを確かめると母に尋ねた。

「もう起きて外で働いているわよ。あなたもひと仕事してきなさい」

「はい」

「あ、自分の寝床をちゃんと直しなさい」

「あ、はい」

ソランは寝床となっていた干草の上に敷かれた麻布をきちんと折りたたんで決められた場所に置いた。

外に出たソランは、晴れた空に魚のうろこのように広がった雲を見上げながら、寒い季節が近づいていることを感じた。

「ソラン。遅いぞ。父さんとわたしはもう薪をたくさん割ったぞ」

妹は父によく似た眼差しを兄に向けた。

「ははは。エイミはまだ子どもなのに薪割りの腕前はたいしたものだ。トモの子どものころによく似ておてんば娘だ。泳ぎもうまくなってきた。ソランよりも速くなったのではないか」

父と妹も朝からきげんが良かった。

「泳ぎではまだ負けないよ。母さんには絶対にはかなわないけどね」

ソランは少し伸びてきたひげを撫でながら答えた。土器に汲んである水で顔をていねいに洗う。

トンボが飛んでいる。チチチチチ。バッタがあちこちで跳ねている。空は青く高い。好きな季節だ。

若い力が湧いてきたソランは大きく伸びをした。

「うまい」「おいしい」

父と子供たちは木の器に取り分けられた朝食を木のさじですくって一口食べると声を上げた。

今朝の料理はコメとともにたっぷりのニラを煮たものだ。かまどの土鍋の中で湯気をたてて煮えている。貝とえびのむき身、それとキノコも入っていた。味付けが工夫されている。良い風味の調味料だ。つぶした豆に塩とこうじを加え、一年近く寝かして作る。トモは「豆づけ」と呼んでいる。海草を少し入れるとうまみが増す。家族は無言で母の料理をたいらげた。舌つつみだけが聞こえた。母は嬉しそうにほほえんでいた。

第7章 狩り

寒い月がやってきた。狩りの季節だ。

夜明けに広場に集合した男たちの息は白かった。皆、毛皮の衣を身につけ、厚い毛皮の足ぶくろを履いている。弓や槍を手にしていて、石の矢じりや槍先がついている。

「タケルはいつものように獲物を射る班に入ってくれ」とダビドが指示する。
タケルは弓の腕前を買われて、まだ若者だが重要な役目を与えられている。

「サトシは先頭の班だ。頼むぞ」

獲物の居所を見つける点でサトシの右に出るものはいなくなっていた。その五感は、木に付けられたわずかな傷も、糞尿のかすかな匂いも、風向き of 少しの変化も見逃さない。

ソランには大人たちにまじって獲物を追い立てる役が与えられていた。親友たちの活躍がソランの心にひがみをもたらすことは決してなかった。

父の言葉が子を育てていた。

「恐れるべき人などいない。卑しむべき人もいない。みな土から取られた器だ。わたしもお前もみな神の子どもなのだ」

「誇ってはいけない。お前が持っている力も知恵も愛も正義も、みな与えられたものだ。ただ感謝しなさい」

「何を見ても神を感じなさい。何に触れても神を感じなさい。神はいつもお前に語りかけている」

東の水平線から赤い太陽が昇ってきた。雲は紫から赤に変わり、すぐに蜜柑色に染まった。出発の合図の太鼓がドンッ、ドンッ、ドンッと三つ鳴り、またドンッ、ドンッ、ドンッと三つ鳴った。

第8章 災い

もう一つの暑い季節が過ぎようとしていた。異変に初めに気付いたのは、沖の海の岩礁に立ったエイミだった。浜辺にいる犬が不思議な鳴き声を上げていた。

「おかしいぞ。モズクがおびえている。どうした何を怖がっている？」
エイミは空を見上げた。見慣れない、縦に長い雲が東の空に見えた。

同じころ森の炭焼き場にいたサトシも周りの自然に不思議な違和感を覚えた。
静かだ。鳥の音がしないぞ。風も止まった。空の色がおかしい。前にも、こんなことがあった……
「じ、地震だ。じ、地震が来る。大きいぞ」
サトシは近くにいた大人たちに声をかけると、すぐに村へ向って走った。

村人たちはコメの取入れを急いでいた。今までにない豊作だった。
「今年は皆の分け前が十分にあるぞ。一年では食いきれないくらいだ。隣村にもわけてやるか。ははは」
「そうだ、『気前よく与えなさい。そうすれば気前よく与えられる』、村長の口癖だ。ははは」

誰の顔にも喜びがあふれていた。ダビドも皆と共に取入れをしながら上機嫌で異国の言葉で歌っていた。
神をたたえる歌だった。

その時だった、天地が音を上げた。鳥が一斉に飛び立つ。村人の歌声は言葉にならない悲鳴に変わった。
大地は滑るように大きく震えた。歩くことができない。皆、地面に手を付いてしゃがみこむ。高い米蔵が音を立てて倒れる。厚い草屋根がいくつも崩れる。激しい揺れは長く続いた後、小さくなっていったが、人々は船よいをしたように呆然とうずくまっている。

「おばあ！」
広場にいたソランは家の中にいたはずの祖母を呼んだ。

村長ダビドの声が響いた。「皆、無事か。屋根の下敷きになった者を助けるのだ」
村人は崩れた家々に駆けつけた。海からあわてて戻ってきた女たちも加わった。村の広場にけがをした人たちが集められた。深い傷を負った者はいなかった。

「良かった。神がわたしたちを守ってくださった」
ダビドは安堵して神に祈った。

そのときだ。サトシが息を切らして走ってきて、叫んだ。
「津波が来るぞ。津波だ。逃げるんだ」
吃音が消えていた。

皆の目は海に向けられる。知らぬ間に、今までに見たことがないほど潮が引いていた。水平線は黒い大き

なうねりとなって静かに岸へと近づいていた。

波は、半時の後に海辺のすべての物を押し流した。

第9章 希望

幾つかの季節が過ぎ、ふたたび一番暑い月となった。

ソランは森の炭小屋から、背中にいっぱい炭をのせて村の父のもとへと歩いていた。蝉の声がやむことなく聞こえる。少し寄り道をして丘の岩場に立った。汗ばんだ体に海風が快い。見下ろす村には新しい、匂うような草屋根が並んでいた。

沖の海では若い女たちが漁をしている。男たちの一団が二つの木船に乗り、遠い沖へと漕ぎ出している。カモメたちが鳴きながらあとを追っている。はるか沖には緑の島影がうすく見える。

砂浜で小さな子供たちが貝を拾い集めている。川沿いの畑にはまだ青い稲の穂が風に揺れている。広場に立てられた日よけの下では年取った女たちが集まって布を織っている。

森から聞こえる甲高い音は、若い男たちが老人たちの指導を受けて斧で木を切り倒している音だ。空に長く上がっているのは炭小屋の煙りだ。父が鉄を打ち叩く音が聞こえる。今は皆にとって故郷の歌となった、異国の歌の朗らかな調べが空に響いていた。

ソランは澄んだ空気を深く胸に吸い込んだ。空と海は、まだ見ぬ世界へとソランを招くように遠く遠く広がっていた。

お風呂に入ってから、ピンク地に小さなイチゴの模様がたくさんついたパジャマに着替えた美香は、濡れた髪の毛をタオルで乾かしながら居間の食卓の椅子に座ると「ふっー」と息をはいた。

「ねえ、パパ。今日さ、クラブで貝塚の調査をしたんだけど、楽しかったよ。やっぱり入ってよかったな。あのね、縄文時代の村の様子をみんなで調べてスケッチもしたんだけどさ。素敵な村なんだよ」

美香の父杉本空歩（そらん）はソファーに腰をおろして涙を浮かべながらテレビの特別番組に見入っていた。二か月前の大地震と津波によって多くの命が失われていた。両親を失った女の子が「お母さんに会いたい」と声を震わせていた。

美香はかまわずに続ける。

「そしたらね、ちょっと恐かったんだけど、その村に地震が起きて津波が襲ってきたところが頭に浮かんできたの。昔も地震はあったのよね」

「埼玉県に津波？」と、向かい側の椅子に座っている弟の悟が魚図鑑から目を上げて不思議な顔をする。小学三年生だ。

「そうよ。昔は海が近くまで来ていたのよ」

「じゃあ、海釣りもできたのかな」と、魚博士の悟が興味を持った。

父はテレビを見ながら片手で涙をぬぐうと声を出した。

「人間ってすごいね。こんな災難にあっても立ち直るんだね」

美香はさらに話しかける。

「パパの先祖はさあ、縄文時代には何をしていたのかな。もしかしたらソランちゃんって呼ばれていたかもしれないね。でも、変な名前よね。誰がつけたんだっけ」

母の和歌子が台所から代わりに答えた。

「パパのお母さんの智子さんよ。長野のおばあちゃん。天狗のように大空を歩いて渡っていくような大きな人間になるようにって願ってつけたんだって」

「パパは名前負けしてるね」と長男の直樹が皮肉る。中学1年生だ。父と並んでテレビを見ながら、ひそかに涙を指でぬぐっていた。

和歌子は祖母の声まねをしながら言った。

「『本当はソラムって読むのだろうけど、言いにくいからソランにしちゃったのよ。あはははは』って笑ってたわ。いつまでも若くて明るいお母さんね」

悟が目を丸くして言った。

「そういえば、このあいだ長野に行ったとき、真田町の温泉プールに行ったけど、おばあちゃんはすごいです」

ピードで泳いでいたよ。びっくりしちゃった。若いときは水泳の選手だったんだって」

杉本空歩はソファから立ち上がり、食卓テーブルの椅子に腰をおろすと、娘に向かって真剣な表情で言った。

「私たちの先祖はきっと縄文時代にも生きていたさ。喜んだり悲しんだり、夢を持ったり失望したりしながら生きてきたのさ。それは私たちと何も変わらない。でもね……」

父はきっぱりと言った。

「何があったって決して希望を失わなかったはずだ。だから美香も直樹も悟も、和歌子も私も、ここにいるんだからね」

父の言葉に娘はうなずいた。

「そうよね……きっと、あの村の人々も何があったって大丈夫よね、きっと立ち直るわ」

美香の目には、建て直されたスケッチの村が浮かんだ。新しい、匂うような草屋根が、明るい日の光を反射していた。人々はみな、輝く笑顔だった。

《天の原 渡って今は やわらかい 枯葉の上に 雪となる》

わたしはいったい何のために、この国に来たのだろう。

父と母は幼い私を連れて何日も何日も、東へ東へと歩き続け、大きな海を渡った。仲間は半分の数に減ってしまったという。しかし、ようやく、「倭国（ワノクニ）」と呼ばれる、この森の国にたどり着いた。そして海沿いの平らな土地に豊かな村を作り上げた。この国の人々とも平和に暮らした。やがて男たちは倭国の美しい女たちを妻に迎えた。災いは何もなかった。が、人々はしだいに故郷の神を忘れてしまい、石や木を神とするようになった。わたしは失望し、父と母の死の後に村を離れた。川をどこまでもどこまでもさかのぼり山をさまよった。私は神の国を見つけるつもりだった。いや、本当の神の国を作ろうと願っていた。

いくつかの寒い季節と暑い季節が過ぎ去った。そして再び、もう一つの寒い季節がやってきた。

わたしは今、力尽きて森の中にいる。私の名、父と母が名づけたダビドという名を呼ぶ者は、もはや誰一人としていない。わたしもまた、故郷を離れて道半ばで倒れ、路傍の土となり、海の泡となった人々と同じになるのだろう。

鳥が鳴いている。朝からの低い曇り空だが、雪はまだ降ってはいない。横たわる体の下では枯葉がカサカサと音を立てている。なんという柔らかさだろう。こんなにも優しくわたしを包んでくれるのか。わたしはこのまま森の土となるのだろう。それが神の意思なのだろう。やがて私は大きな樹になってたくさんのどんぐりを生らせるのだろう。

雪が降り始めた。森がみるみると姿を変えてゆく。音もなく白い世界に変わってゆく。美しい。父と母の故郷の国にあるというヘルモン山に降る雪もこんなに胸を打つのだろうか。

少しも寒くはない。暖かいくらいだ。雪よ、降れ。わたしの上に降り積もれ。厚く厚く降り積もれ。わたしを静かに眠らせておくれ。

この耳に聞こえる歌はなんだろう。懐かしい母の歌に似ている。

《しんしんしん、雪ん子さん、ちいさ菜(な)ひとつくださいな、小さな小さな声ひとつ》

あのね、トモはね。初めてあなたを見たときに雪の精だと思ったのよ。だって真っ白な雪のなかで気持ちよさそうに微笑みながら眠っていたのだもの。あなたの鼻の高いことといたら、とてもびっくりしたわ。わたし、お母さんに教わった通りに歌を歌ったの。きっと雪の精が歌を聴いて目をさまして、トモたちの村を豊かにしてくれると思ったの。でも、あなたは病気にかかって倒れていたのね。村の大人たちがすぐにあなたを助けてくれたわ。目をさました時、あなたはやっぱり微笑んでいた。あなたの目は茶色に輝いていた。

あなたの名前を初めて聞いたとき「旅人」と聞こえたわ。ダビド。

あなたが私を愛してくれるなんて夢のよう。わたしはあなたを見つけた子供のころからあなたが好きだった。私を見つめる優しいまなざしに出会うたびに心が震えたわ。

わたしが十六の時、あなたが旅に出ることになった夏に、湖でいつまでもいつまでも泳ぎました。泣きな

が泳ぎました。もうあなたに会えなくなるという予感がしたの。約束の、三つ目の満月の日が過ぎて秋になってもあなたは帰らなかった。村の長の父がすすめる嫁入りを断れなくなってしまったの。わたしが村を離れた後、すぐにあなたが帰ってきたことはずっと知らなかったわ。

わたしは遠い西の村へと嫁いでいきました。夫はやさしい人で、私を大切にしてくれました。かわいい息子も生まれました。でも、村は戦に巻き込まれ、夫は死んでしまったの。わたしは息子を連れて必死で逃げた。故郷の村の方角に何日も何日も必死であるいたわ。もうどこにいるのかまるで分からなくなってしまった。ダビド、あなたの神に祈ったわ。あなたに会わせてくださいと。

《土のなか 小さな空間 あたえられ 精一杯に 我が身を伸ばす》

トモ、わたしは皆のおかげで命を救われた。この村のためにできることを精一杯に行って恩返しをしたいと思い、力の限りにはたらいだ。言葉の分からない私に皆は本当に親切にしてくれた。君の父と母は息子のようになんか接してくれたね。わたしは、根を張り育つべき地をやっと見つけた小さな種のようなのだ。この村こそ神の国だと分かったのだ。あつという間に七年がたった。ほんの数日のようだった。君と兄妹のように過ごした日々は本当に楽しかった。

皆が移り住むことのできる良い土地を探すために、わたしは東の海へと旅に出た。二つ目の満月の後にやっと海と川と森のある美しい土地を見つけて、わたしは有頂天になってしまった。黒い砂浜からは磁石岩を使って砂鉄が面白いように取れた。村に持ち帰って鉄の道具をたくさん作ろうと思った。父が教えてくれた鍛冶の技術が役立つと思った。帰る途中で鮭の登る川を見つけた。数えきれない鮭が上流を目指して泳いでいた。出会った小さな村の老人に鮭の保存法を教えてもらうためにしばらくとどまった。近道をして帰ろうとして、わたしは慣れない道に迷ってしまった。見知らぬ山のなかで三つ目の満月を見た。約束の日が過ぎてしまったが、その時はあまり気に留めなかったのだ。

トモ、村に帰って君がいないことを知った時のわたしは、まるで雷に打たれて裂けて倒れた椎の木のようになった。もう何も実をならすことができない枯れ木のようにうつろになった。夢の中で、君を見つけてすごく安心するのだけれど、それはやはり覚めてしまう夢だった。わたしも消えてなくなってしまいたかった。

《春を待つ わたしの命は 日の光り 大地の響きに 胸ふくらます》

ダビド、わたしが偶然にこの海辺の村を見つけたとき不思議と懐かしい気持ちがしたわ。雪の降る中で息子と二人で飢えと寒さに震えていたけれど、なぜかほっとする安心感が心に宿ったの。ここにあなたがいる。初めてあなたを見つけた、あの時と同じだって感じた。本当よ。わたしには分かったの。あなたがわたしを待っていることが。

うふふ、あなたがわたしを見つけた時の顔が忘れられない。うつむいていた茶色の瞳にみるみる光が宿ったわ。私が消えてなくならないように、きつく抱きしめたのね。うれしかった。あなたとの二番目の出会いも雪の中だった。やっぱりあなたは、村を豊かにしてくれる雪の精なのだよ。

新しい海辺の村はすてきなところね。春にはどんな花が咲くのかしら。夏になったらこの海をどこまでも泳ぐの。わたしは泳ぎでは誰にも負けないのよ。あなたにだって負けないわ、ダビド。

息子は虫も殺せないやさしい子供よ。あなたならきっと良い父親になってくれると思う。

ダビド、私はこの土地できっと幸せになるわ。わたしは野に咲く小さな花よ。冬の間、真っ白な雪をかぶっているけど、春が近いことがわかるの。だって白い屋根を透ける日の光がだんだん明るくなってくるし、地面の下のたくさんの生き物たちの胸の鼓動が聞こえてくるもの。

ダビド、あなたの名前のひびきは「旅人」に聞こえたわ。本当に遠い地から来た旅人なのね。わたしを見つけてくれてありがとう。

古代少年

<http://p.booklog.jp/book/80687>

著者：金時 豆太郎

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kintokimame/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80687>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80687>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ